

福祉の哲学序説*

中野伸彦**

Introduction to Philosophy of Welfare

Nobuhiko Nakano**

【キーワード】

福祉、哲学、思想、人間観、援助観

【要旨】

福祉に哲学が必要だと指摘されるようになって既に久しい。福祉の学問や実践の場でこの動きが顕著になってくるのは1970年代以降のことである。以来、福祉の哲学（または思想）は研究者の間で様々な視座や視角を通して語られていくことになる。いわゆる基礎構造改革期に相次いで提示されるようになった人権擁護や自立支援に関する諸々の価値や倫理は、一般にそれらの成果物と考えられている。だが、現在、この国で強調されている福祉の価値や倫理が、本当にこの国の福祉理論や実践現場における長年の検証や蓄積の結果として醸成されてきたものかどうかは検討に値する。仮にそうでないとするならば、そうした土壌こそが本来、哲学の対象とすべき問題なのかもしれないからである。

そこで本稿では、そもそも福祉の哲学とは何か、また、なぜ福祉に哲学が必要と考えられるようになってきたのか。これらの背景をたどりながら、福祉と哲学との関係を論じたこれまでの研究動向を先行研究的手法によって分類整理し、あわせて福祉の哲学が担う今後の可能性や展望を概観する。

I. 哲学とは何か

哲学とは、一般に、人間や社会、自然や道徳、神や他者、存在や意識などの諸事象のしくみを解明し、私たちが生きている世界の全体を説明する普遍的な原理を模索することが共通の課題といわれている。たとえばカントやヘーゲルなどの歴史上の哲学者や思想家の業績を振り返れば、それぞれの生きた時代において神や自然や道徳や言語などの異なった主題に取り組みつつも、究極的には世界や人間をどう観るかといった全体的なものの方や考え方の妥当性を模索することに収斂され

ており、彼らが哲学者や思想家と呼ばれる理由もそこにあった。⁽¹⁾

これに対し、社会学や医学や物理学などの諸科学の役割は、世界を構成する個別的な対象の範囲内の法則性や方法論の探究に限定されており、これが、「哲学」と「科学」とを分ける違いとなっている。この意味で「哲学」は、世界解釈の途上においては「科学」の成果や方法論を一部活用しながらも、同時に「科学」の根拠や進むべき指針や科学者のあるべき姿勢をもさし示す役割を担っていることになる。このことは、世界の中に取り込まれている私たち一人ひとりの人間にとっても、日常の暮らしの中で「どう生きるか」「どう実践すべきか」という課題に直面した際に、その選択のための指針をさし示してくれることにつながっていく。

一方、「哲学」としばしば類似的に使用される「思想」との違いについてはどうであろうか。両者は世界観や人間観の全体に関わる説明概念を模索するという点では共通でありながらも、「思想」は“学”と呼ばれない分だけ「学的体系」の拘束から解放されており、いわば神や人間や認識などの伝統的な知の体系以外の文脈からでも（例えば文学や詩や芸術や音楽などを介しても）広汎に表現することが可能な余地を残している。その一方で、「思想」を「哲学」の手段やプロセスとみなす立場があったり、あるいは殆ど同じ意味で用いている文献等も少なくない。本稿では、「哲学」や「思想」の〈領域〉が福祉とどのような関連性を持つのかを主要な関心事としているため、ここでは「哲学」と「思想」の両者についてはあえて明確に区別せずに使用することを断っておきたい。

II. 福祉の哲学とは何か

福祉とは、単純化して考えれば「人が人を支えるしくみや行為や考え方」でもあるといえる。⁽²⁾ その際の「しくみや行為や考え方」については、

* Received January 31, 2009

** 長崎ウエスレヤン大学 現代社会学部 社会福祉学科、Faculty of Contemporary Social Studies, Nagasaki Wesleyan University, 1057 Eida, Isahaya, Nagasaki 854-0081, Japan

現存する福祉制度の実態に即して表現する場合と、あるべき目標像としての理念を語る場合とに大きく分けられるが、いずれにせよ福祉が「人が人を支えること」である点に変わりはない。

ところで、こうした「支えのしくみや行為や考え方」の存在は何も日本だけに限ったことではない。いうまでもなく今日の先進諸国は共通に社会福祉の制度や実践体系を備えており、そうした制度化に至る以前の相互扶助や個人的な支援行為（この場合は、「社会福祉」というよりも、単に「福祉」または「福祉的行為」などと呼ばれることが多い）をも含めると、「人が人を支える行為」は、時空を超えた人類の普遍的な営みの一つでもあるといえる。ここに、国境や民族や人種の違いを超え、また一国の現存する社会福祉制度の枠に捕らわれない普遍的な原理・原則が福祉の哲学や思想の名のもとに成立する余地がある。「人権」「平和」「自由」「平等」「命の尊厳」「人格の尊重」「福祉の心」「共感」「共存」「共生」「幸福」などの人類にとって普遍的な価値や理念が、しばしば福祉の哲学や思想の中身として語られてきたのはこのためである。

こうした普遍的な価値や理念が共通にさし示す意味内容のみていくと、いずれも不当な評価や待遇、抑圧や暴力、排除や収奪、差別や偏見といった状態とは対置される概念であることがわかる。もとより不当な差別や偏見を払拭するためには、基本的に人間存在の根源的な〈生〉（Leven）が全体として捉えられることを前提としなければ達成できない。その意味では、「人権」や「共生」などの諸々の普遍的な価値は、「人間の〈生〉が全体として捉えられる」という表現の中にまずは収斂され、さらには「対等な関係」や「公正な扱い」などがこれに続くことになる。このことから福祉の哲学や思想は、共通に人間の〈生〉が全体として捉えられる〈関係性〉を不可欠なテーマとし、もし、こうした〈関係性〉を阻むような待遇や扱いが一般社会はもとより福祉の現場においても行われているとするならば、そうしたしくみを問いただし、本来の方向へと導く役割をも担うことになる。このことは支えの行為自体が直接的には人間同士の〈関係性〉の上に成り立つ営みでもあることと深く関わっており、いわば普遍的で原理的な「人間観」や「援助観」の確立が社会福祉の前提に問われていることをより一層明白にしている。福祉の哲学は、こうした脈絡を通して、現存する社会福祉の制度と実践とを普遍的な目標概

念に近づけていく役割を担うものと考えられる。

一方、秋山智久は1982年の論文「〈社会福祉哲学〉試論」の中で、「従来、わが国において〈福祉の哲学〉という表現はあったが、〈社会福祉哲学〉という表現は、寡聞にして聞いたことがない」として、いわゆる実体概念としての制度的・組織的な「社会福祉」と、個人的な支援行為や目標概念をも含む「福祉」とを区別し、「思い切って〈社会福祉哲学〉という語を使用することとする」⁽³⁾と記している。このことは、「福祉の哲学」が単に人権論や共生論を語るだけでも成り立つ余地を残しているのに対し、「社会福祉哲学」の場合は今日の社会福祉の実態的な制度体系と「哲学」が直接接合される意味あいにおいて、現実の社会福祉制度のありようにより強い影響力を及ぼしたいとする秋山の積極的な意図が読み取れる。しかしながら、実態的な「社会福祉」であれ、個人的な支援行為としての「福祉」であれ、原理的には「人が人を支えるしくみや行為や考え方」を共通の要素としている以上、そこに求められる「人間観」や「援助観」に違いがあるはずはない。これを言い換えれば、あらゆる支えの場面に求められる「人間観」や「援助観」に一定の普遍性があれば、その場面が「福祉」であれ「社会福祉」であれ、ともに有効なはずである。そこでは「福祉」と「社会福祉」とを分ける意味もなくなるのである。秋山の関心は、おそらく「人間観」や「援助観」の内実を深く探求することよりも現行の〈日本における〉福祉理論や制度体系をいかに再構築するかという方向に力点を置きたかったためと推察されるが、本稿はそうではない。まずは支えの場面に求められる「人間観」や「援助観」のありようを確かめることに重心をおきたいので、ここでは、一貫して〈福祉の哲学〉という表現でおすことにした。ただし、秋山の関心にも十分配慮しつつ論をすすめていくことにしたい。そこで、この国の福祉に哲学や思想が求められるようになってきた今日的な背景からまずは辿ってみたい。

Ⅲ. 福祉に哲学や思想が求められる背景と課題

福祉に哲学や思想の必要性が指摘されるようになって既に久しい。秋山によると、日本で福祉の哲学や思想に関する著述が登場し、また学界などのテーマとして取り上げられるようになっていくのは1970年代以降のことであると指摘している。⁽⁴⁾この時期は、戦後の高度経済成長が低成長に切り替わったことで、暮らしの指標は量から質へ、社

会福祉の制度は緊縮財政による「福祉見直し」等を経て、施設福祉から地域・在宅福祉への転換を迫られた時期でもあった。以来、福祉の哲学や思想は、こうした揺らぎの時代とともに様々な視座や視角を通して語られていくことになる。いずれも社会福祉のパラダイムの前段に位置づけられる人間観や社会観や援助観を明らかにしていくことで社会福祉の揺るぎなき基盤や指針づくりに役立てようとするものであるが、その背景には、次の五つの課題があった。

第一に社会福祉体系化の課題である。わが国の社会福祉理論は、戦後一貫して学的体系化が要請されてきた。学的体系化とは応用諸科学との関連の中で独自の専門領域を確立させ、社会福祉固有の制度や実践の体系を科学的・論理的に明らかにしていくことであった。そのためには研究領域を「自己限定」(岡田藤太郎)⁽⁵⁾し、科学的な客観主義や経験一実証主義によって裏づけていく必要があった。ところが、このことは一方で学的体系化の前段にあるべき人間観や援助観の位置づけを、①科学の領域を逸脱している、②計量化できず空虚すぎる、③制度や政策の実情に合致しない、④具体的なサービスに直結できない、などの理由で遠ざけることにもなっていく。このため社会福祉の体系論と哲学や思想との関係は、一体化の必要性が論議される一方で、うまくその接点を見出せずに今日に至っている。⁽⁶⁾

第二に社会福祉一元化の課題がある。戦後、社会福祉の制度や実践を論理的に体系化していく歩みの中で設立されてきた日本社会福祉学会や日本ソーシャルワーカー協会や日本社会事業学校連盟(現:日本社会福祉教育学校連盟)等の役割は、福祉の理念や価値的な側面を採りこみながら、同時に実態としての法律や行政制度や施設、機関、専門職制、援助技術等にかかわる「専門用語」の体系を、ことごとく一義的なカテゴリーによって均質的に捉えていくことを目標にしてきた。福祉従事者の養成課程に関わる国家資格法の制定⁽⁷⁾や高校教科「福祉」の設置などは、そうした成果の一つでもあるといえよう。ところが、こうした動きは、一方で社会福祉の対象を規定する際に、多様で複雑なニーズをかかえる生活者の暮らしの全体から均質的に観察できる範囲のみを抽出しがちになり、生活者自身がかかえる潜在的で個別的な心のニーズをそぎ落としてしまう傾向を伴っていた。つまり社会福祉の一元化の方向性と、対象者がとり結ぶ「社会関係の主體的側面」(岡村重夫)

を重視しつつ「全人的人間の統一的な人格」(嶋田啓一郎)の確立をめざす方向性⁽⁸⁾との間に、一種の乖離現象を生じさせてしまったことがあげられる。

第三に、上記した一元的な対象規定が具体的な実践場面へと展開された際に生じる課題がある。例えば、①法律や行政的な基準によって機械的に定められる対象規定、②人・モノ・費用面に対応可能な範囲に限定された対象規定、③政治的または経済的な状況に左右される対象規定、④人の状態のうちマイナスの〈属性〉にのみ焦点づけられる対象規定、⑤部分的〈属性〉が全身化、固定化されていく対象規定、⑥援助者―被援助者間の格差と固定化をおしすすめていく対象規定、⑦対象規定によって余儀なくされる生活面での制限と強制、⑧対象者からの不服や意思表示のツールなき対象規定など、いずれもあらかじめ定められた基準が一方向的に用いられた際に生じがちな項目である。そこには被援助者側の自己実現や自己表出の扱いをはじめ、援助者―被援助者間に生じる非対称性やスティグマに関する課題などが温存されたまま今日に至っている。⁽⁹⁾

第四に近年の人権をめぐる論理や表現上の課題がある。いわゆる障害者と非障害者との間の判然とした形態的・能力的差異を前にして発せられる「なぜ“同じ”人間なの？」という素朴な問いかけに対して、私たち福祉関係者は人間存在(いのち)の同質性の根拠をどう説明してきたのだろうか。また「なぜ人を殺してはいけないの？」という実存レベルの問いかけに対しても、明快に答えられるだけの言葉と論理を私たちはこれまで用意できていたのだろうか。⁽¹⁰⁾少なくとも「人には人権があるから」だけでは説明にならないのである。⁽¹¹⁾或いはまた、現存する〈生〉の苦悩を「どうして自分だけがこんな目にあうの？」と涙ながらに訴えかけてくる人々に対して、どのような応答が可能なのだろうか。そこでは先験的で平板な知識や言葉が何の役にも立たないことを知っておく必要がある。だからこそ、そうした場面が露になってくるものが何であるかをじっくり見定めておく必要があるのではないか。

第五に平和、人権、環境、生命倫理などの地球(人類)規模の課題がある。この地球上には、現在もなお紛争、飢餓、貧困、難民、環境破壊など数多くの人権に関わる福祉的な課題が絶えずなく山積されている。こうした問題に対して、一国ナショナリズムを超えた支えあいや学びあう精

神が、今、国際社会の一員としての日本にも強く求められるようになってきていること。さらには「人間らしく死ぬ」（福武直）ことをテーマに、ホスピス、ターミナルケア、脳死、安楽死、墮胎などの諸問題を生命倫理の課題としてどう位置づけていくかが社会福祉の領域でも問われるようになってきていること。

以上五つの課題は、いずれも福祉の理論や実践の体系が、普遍的で豊かな人間観や社会観や援助観のあり方を説く哲学や思想と一体的に、もしくは車の両輪のような関係で体系化される必要があることを示唆している。

IV. 福祉の哲学・思想研究の4類型

戦後日本の福祉に関連する哲学や思想研究の動向を概観すると、その視座やアプローチについては、おおむね次の四つのカテゴリーに分類することができる。⁽¹²⁾

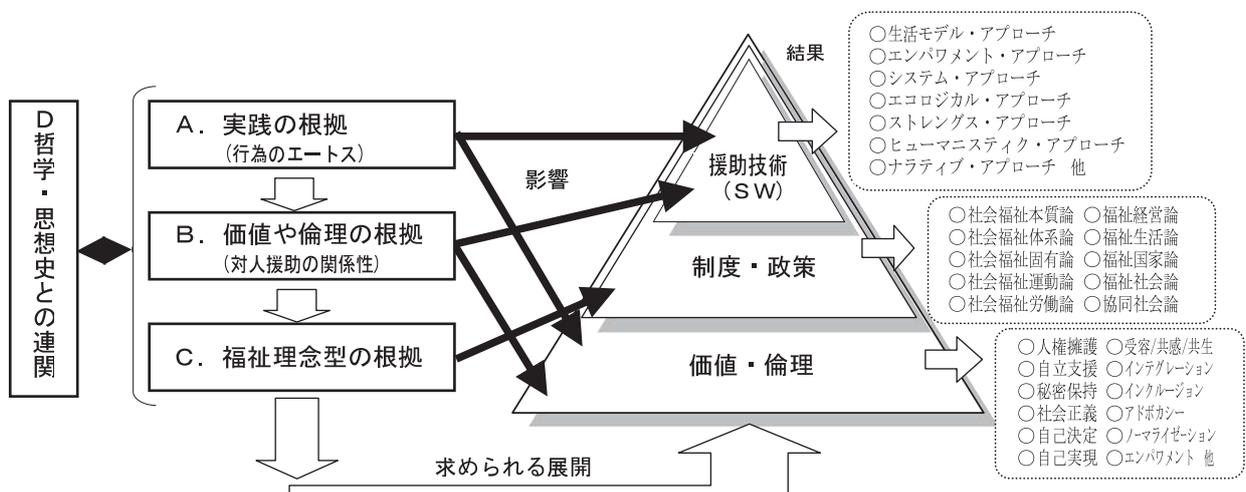
- A. 「実践の根拠」
→（現場実践の中から、その動機や背景に透視する行為のエトスを論じたもの）
- B. 「価値や倫理の根拠」
→（対人援助の現場の課題から、その豊かな関係性の指標を模索したもの）
- C. 「福祉理念型の根拠」
→（社会福祉の理念型やパラダイムを基礎づける考え方を論じたもの）
- D. 「哲学・思想史との連関」
→（伝統的な哲学や思想史の文脈と福祉的事象との関連を論じたもの）

Aの「実践の根拠」（行為のエトス）の類型は、主として宗教的・思想的なバックボーンをもつ現場実践者が日々の実践の中から紡ぎだしてきた人間観や援助観を明らかにしたもので、自らの内面を点検しつつ、被援助者との出会いや「共に」あることの喜び・願いなどが実践記録として語られていく。そこに、人が人を支える意味や福祉実践の根拠を見出すことができる。代表的な論者に糸賀一雄、伊藤隆二、阿部志郎があげられる。

Bの「価値や倫理の根拠」（対人援助の関係性）の類型は、主として生活者である被援助者の主体的側面にスポットを当てたもので、生活者本人の経験の意味を明らかにしていくことによって、対人援助の現場に生じがちな援助者－被援助者間の非対称性やスティグマに関する問題構造を浮き彫りにし、そこから豊かな関係性の構築に向けた道筋が示される。いわゆる一方的・一元的な対象規定の問題が明るみになることで、実践体系の基礎となる価値や倫理の中身にも大きな影響を与えるほか、現行の供給システムのあり方にも改編を迫ることになっていく。さらには援助技術（ソーシャルワーク）の新たな指針をさし示す役割をも担っている。近年、若手研究者の間ではこのアプローチに対する関心が急激に高まっており、主な論者としては狭間香代子、長瀬修、三好春樹、好井裕明らがあげられる。⁽¹³⁾

Cの「福祉理念型の根拠」の類型は、日本の社会福祉の体系化を試みた業績の中でも、とりわけ社会観や援助観において一貫した姿勢があり、社会福祉の全体的なパラダイムの構築に思想的な貢献を与えてきたものを指している。結果として描

図－1 福祉の哲学・思想研究の4つのカテゴリーと社会福祉の体系⁽¹⁵⁾



かれる福祉モデルや制度モデルが必ずしも既存の社会福祉制度と一致していなくても、体系化に向けた固有の指針と枠組みがそこには提示されている。代表的な論者に岡村重夫、孝橋正一、嶋田啓一郎の他、近年では社会福祉哲学論を独自に展開している秋山智久、福田静夫があげられる⁽¹⁴⁾。

Dの「哲学・思想史との連関」の類型は、伝統的な哲学や思想が提示する世界観や人間観と、現行社会福祉のパラダイム（または歴史的な福祉実践）との関連性を、主として伝統的な哲学や思想の文脈をそのまま用いながら対比的に論じたもので、いわゆる哲学や思想の知見と社会福祉との接点の多様さが明示されることで、両者の不可分な関係があらためて浮き彫りになっている。代表的な論者に竹内愛二、吉田久一、関谷新助があげられる。

以上の社会福祉に関する哲学・思想研究の四つのカテゴリと現行の社会福祉体系論との関係を図示すると、図-1のようになる。

V. 福祉の哲学・思想関連の文献

先行研究としての観点から、以下、戦後から今日（～2005年）までの福祉に関する哲学・思想関連の主な研究著書・論文を年代順に掲げる。尚、掲載にあたっては、国立国会図書館に登録されているすべての刊行物の中から、福祉関連で「哲学」や「思想」という表現を直接タイトルに使用しているものをすべて抽出し、これにネット検索や関連論文の脚注等を参照しながら漏れのないように努めたが、紙幅の都合で一部割愛せざるを得なかったものがあつたことを断っておきたい。また、表-1の項目に掲げる「類」については、それぞれの著書・論文の内容を、上記した4つのカテゴリー別に分類したもので、その結果を年代順に図示したものが表-2である。尚、この分類にあたっては、一部、明瞭に区分できないものがあつたことも断っておきたい。

表-1 福祉の哲学・思想関連文献一覧

【著書】

NO	著者	著書名	出版社	発行年	類
1	岡村重夫	社会福祉学（総論）	柴田書店	1958年	C
2	孝橋正一	全訂社会事業の基本問題	ミネルヴァ書房	1962年	C
3	糸賀一雄	福祉の思想	日本放送出版協会	1967年	A
4	E. ヤングハズバンド	社会福祉と価値	誠信書房	1973年	C
5	伊藤隆二	福祉の思想・入門講座（1巻～4巻）	柏樹社	1976年	A
6	竹内愛二	社会福祉の哲学～新実存主義的考察	相川書房	1979年	D
7	嶋田啓一郎	社会福祉体系論 ～力動的統合理論への途～	ミネルヴァ書房	1980年	C
8	嶋田啓一郎	社会福祉の思想と理論 ～その国際性と日本的展開～	ミネルヴァ書房	1980年	C
9	小倉襄二	市民福祉の政策と思想～参加と計画	世界思想社	1983年	C
10	柴田善守	社会福祉の史的発展 ～その思想を中心として～	光生館	1985年	C
11	阿部志郎	地域福祉の思想と実践	海声社	1986年	C
12	赤坂憲雄	排除の現象学	洋泉社	1986年	B
13	N. ティムズ D. ワトソン	社会福祉の哲学～ソーシャル・ケース ワークを中心に～	雄山閣	1988年	B
14	大塚達雄編	社会福祉実践の思想	ミネルヴァ書房	1989年	C
15	池上 惇	福祉と協同の思想	青木書店	1989年	C
16	田中未来	教育と福祉のための人間論 ～人間援助の思想を求めて～	川島書店	1989年	B
17	吉田久一	日本社会福祉思想史	川島書店	1989年	D
18	福田静夫	社会福祉の人間の原理 ～現代福祉を哲学する～	文理閣	1990年	C
19	山田富秋 好井裕明	排除と差別のエスノメソドロジー ～いま・ここの権力作用を解読する～	新曜社	1991年	B

20	飯田精一	福祉を哲学する	近代文芸社	1992年	A
21	竹内章郎	「弱者」の哲学	大月書店	1993年	B
22	嶋田啓一郎	生協と福祉の思想	コープ出版	1993年	C
23	武井 満	障害の思想～共存の哲学は可能か～	星和書店	1994年	B
24	加藤博史	ソーシャルワークの思想と実際 ～P S Wの総合的展開～	晃洋書房	1994年	A
25	花村春樹	「ノーマライゼーションの父」N・E・ バンク・ミケルセン～その生涯と思想	ミネルヴァ書房	1994年	A
26	吉田久一	日本の社会福祉思想	勁草書房	1994年	D
27	村田久行	ケアの思想と対人援助 ～終末期医療と福祉の現場から～	川島書店	1994年	B
28	上原英正	福祉思想と宗教思想～人間論的考察	学文社	1995年	D
29	加藤博史	福祉的人間観の社会史 ～優生思想と非行・精神病を通して～	晃洋書房	1996年	B
30	阿部志郎	福祉の哲学	誠信書房	1997年	A
31	三好春樹	関係障害論	雲母書房	1997年	B
32	田中良三	みんなが輝く～発達・福祉の思想～	かもがわ出版	1997年	A
33	福田静夫	「いのち」の人間学(アントロポロキー) ～社会福祉哲学序説～	青木書店	1998年	C
34	二文字理明	スウェーデンの障害者政策、法律・報 告書～21世紀への福祉改革の思想～	現代書館	1998年	C
35	木原活信	J. アダムズの社会福祉実践思想の研 究 ～ソーシャルワークの源流～	川島書店	1998年	A
36	浜野一郎 遠藤興一	社会福祉の原理と思想 ～主体性・普 遍性をとらえ直すために～	岩崎学術出版社	1998年	B
37	伊藤隆二	全包括教育(インクルーシブ)の思想 ～社会的不利をなくす道～	明石書店	1998年	C
38	金子光一	ピアトリス・ウェッブの福祉思想	ドメス出版	1998年	C
39	秋山智久 嶋田啓一郎	社会福祉の思想と人間観	ミネルヴァ書房	1999年	C
40	好井裕明	批判的エスノメソドロジーの語り	新曜社	1999年	B
41	長瀬 修 石川 准	障害学への招待	明石書店	1999年	B
42	三宅敬誠	宗教と社会福祉の思想	東方出版	1999年	D
43	布引敏雄	隣保事業の思想と実践 ～姫井伊介と労道社～	部落解放・人権研 究所	2000年	A
44	正村公宏	福祉国家から福祉社会へ ～福祉の思想と保障の原理～	筑摩書房	2000年	C
45	田中和男	近代日本の福祉実践と国民統合 ～留岡幸助と石井十次の思想と行動	法律文化社	2000年	A
46	原 慶子	ヒューマン・ケアの思想と実践 ～介護保険制度を超えて～	ドメス出版	2000年	C
47	吉田久一 岡田英己子	社会福祉思想史入門	勁草書房	2000年	D
48	新保 哲	日本の福祉思想	北樹出版	2000年	D
49	忍 博次	社会福祉を考える ～変わりゆく福祉の思想を求めて～	響文社	2000年	D
50	牛島義友	福祉の哲学と技術	慶應義塾大学出版 会	2000年	C

51	栗村典男	援助関係の原点〈1〉 ～社会福祉哲学への試み～	日本図書刊行会	2001年	B
52	京極高宣	この子らを世の光に ～糸賀一雄の思想と生涯～	日本放送出版協会	2001年	A
53	阿部志郎	新しい社会福祉と理念 ～社会福祉の 基礎構造改革とは何か～	中央法規	2001年	C
54	中野伸彦	福祉の輪郭と思想 ～対人援助のパースペクティブ～	創言社	2001年	B
55	狭間香代子	社会福祉の援助観～ストレングス視点・ 社会構成主義・エンパワメント～	筒井書房	2001年	B
56	萩原俊一	バリアフリー思想と福祉のまちづくり ～建築と福祉の融合をめざして～	ミネルヴァ書房	2001年	C
57	田尾雅夫	ボランティアを支える思想 ～超高齢社会とボランティアズム～	アルヒーフ	2001年	B
58	吉田久一	日本仏教福祉思想史	法蔵館	2001年	D
59	桑原洋子	社会福祉の思想と制度・方法 ～桑原洋子教授古希記念論集～	永田文昌堂	2002年	C
60	清水海隆	仏教福祉の思想と展開に関する研究	大東出版社	2002年	D
61	阿部志郎	講座戦後社会福祉の総括と21世紀への 展望〈2〉～思想と理論～	ドメス出版	2002年	C
62	古川孝順	援助するということ	有斐閣	2002年	B
63	木原孝久	福祉の人間学入門	本の泉社	2002年	B
64	河見 誠	現代社会と法原理 ～自由、生命、福 祉、平等、平和のゆくえ～	成文堂	2002年	D
65	菊池正治	日本社会福祉の歴史 付・史料 ～制度・実践・思想～	ミネルヴァ書房	2003年	C
66	長谷川匡俊	ボランティアの時代 ～「共生」の思想を考える～	中央法規出版	2003年	B
67	住谷 馨	人間福祉の思想と実践	ミネルヴァ書房	2003年	A
68	吉田久一	社会福祉と日本の宗教思想～仏教・儒 教・キリスト教の福祉思想～	勁草書房	2003年	D
69	京極高宣	京極高宣著作集（第七巻）福祉思想	中央法規出版	2003年	C
70	岩田正美	社会福祉の原理と思想	有斐閣	2003年	C
71	朴 光駿	社会福祉の思想と歴史 ～魔女裁判か ら福祉国家の選択まで～	ミネルヴァ書房	2004年	C
72	小堀憲助	「知的（発達）障害者」福祉思想とそ の潮流～東西国際社会思想の比較～	中央大学出版部	2004年	C
73	増田樹郎 山本 誠	介護の思想 ～なぜ人は介護するのか～	kumi	2004年	B
74	原 慶子	福祉実践と平和の思想	ドメス出版	2004年	A
75	秋山智久	社会福祉の思想・理論と今日的課題	筒井書房	2004年	C
76	秋山智久	人間福祉の哲学	ミネルヴァ書房	2004年	B
77	関家新助	西洋哲学思想と福祉 ～人権思想を中心に～	中央法規	2004年	D
78	ポール・スピッカー	福祉国家の一般理論～福祉哲学論考	勁草書房	2004年	C
79	塩野谷祐一	福祉の公共哲学	東京大学出版会	2004年	C
80	中山 愈	社会福祉原理 ～人間福祉と生命論理 の統合を哲学する～	弘文堂	2005年	B
81	山脇直司	福祉思想の革新	シーエーピー出版	2005年	B

【論文】

NO	著者名	論文名	掲載雑誌名	巻号	発行年	類
1	谷 昌恒	社会福祉における人権の思想	社会福祉研究	12	1973年	A
2	長洲一二	福祉の科学と哲学を	社会福祉研究	20	1977年	C
3	阿部志郎	ボランティア活動の思想的基盤と今日の課題	公衆衛生	42/ 466	1978年	A
4	嶋田啓一郎	キリスト教的価値観と社会福祉実践	基督教社会福祉学研究	11	1978年	D
5	谷 昌恒	幸福とは？社会的に分かちあう意志をもてること ～“福祉のこころ”と福祉哲学～	月刊福祉	61- 4	1978年	B
6	石井次郎	福祉の哲学	牛島義友『福祉の哲学と技術』		1980年	C
7	嶋田啓一郎	社会福祉における価値と方法論	『社会福祉方法論講座Ⅰ』		1981年	C
8	秋山智久	「社会福祉哲学」試論～平和・人権の希求と社会福祉的人権観の確立～	社会福祉研究	30	1982年	C
9	中野伸彦	社会福祉と＜権利性＞ ～「価値」構造の諸相を巡って～	風跡	6	1982年	B
10	中野伸彦	社会福祉の援助関係 ～その意味論的再構成の意義～	九州文化学園短期大学紀要	3	1983年	B
11	柴田善守	社会福祉哲学のための覚書～江戸時代の社会福祉～	社会福祉論集	19/ 20	1983年	D
12	柴田善守	社会福祉の哲学的基礎づけについての覚書(3)～明治期の社会福祉～	大阪市立大学生活科学部紀要社会福祉学	31	1983年	D
13	中山 愈	ヘーゲルの福祉哲学	広島女子大学文学部紀要	22	1986年	D
14	岡田 真	ヒューマン・エコロジーにおける「科学」と「哲学」～「生活モデルSW」のテクノロジーの有効性をめぐって～	駒大社会学研究	1-1 4	1987年	B
15	太田義弘	ソーシャル・ワーク実践の根底を支える価値	基督教社会福祉研究	20	1988年	B
16	加藤博史	社会福祉の思想および機能領域に関するフレームワーク	同志社大学社会福祉学	4	1990年	C
17	阿部志郎	社会福祉の哲学(前)	月刊福祉施設士	111	1991年	A
18	尾崎和彦	アルフレーズ・Th. ヨーアンセの博愛主義的福祉思想～デンマーク福祉思想の生成と展開4～	明治大学教養論集	276	1995年	A
19	尾崎和彦	アルフレーズTh. ヨーアンセンの福祉思想～その結論について～	明治大学人文科学研究紀要	38	1995年	A
20	金子光一	19世紀末期におけるピアトリス・ウェブの福祉思想～ウェブ夫婦の業績を通じて～	淑徳大学研究紀要	29	1995年	A
21	高田真治	社会福祉の内発的発展の課題と展望～社会福祉思想二元論から関係論へ～	関西学院大学社会学部紀要	72- 1	1995年	B
22	吉田久一 鈴木五郎	21世紀につなぐ・人物でつづる社会福祉思想史～私の出会った社会事業家たち～	月刊福祉	78	1995年	A

23	横関 至	室田保夫著『キリスト教社会福祉思想史の研究』	法政大学大原社会問題研究所雑誌	449	1996年	A
24	中山 愈	ディアコニア ～人間福祉思想論～	広島女子大学生生活科学部紀要	3	1997年	D
25	関家新助	社会福祉の哲学・倫理思想序論	日本社会事業大学研究紀要	44	1997年	D
26	森 総子	日本の福祉哲学～明治末期から昭和初期に日本的なるものを求めて～	流通経済大学大学院社会学研究科論集	4	1997年	D
27	中山 愈	ラヴ&アガペー ～人間福祉思想論	広島女子大学生生活科学部紀要	4	1998年	D
28	清水良衛	社会福祉思想の基礎を求めて～実践哲学としての私の課題	帝京平成大学紀要	10	1998年	A
29	清水良衛	福祉思想の淵源～福祉時代への性善説からのアプローチ～	比較思想研究	24	1998年	A
30	石山勝巳	いのちと共生の福祉哲学の提唱	九州社会福祉研究	24	1999年	B
31	阿内正弘	福祉哲学序論	淑徳大学社会学部研究紀要	33	1999年	C
32	福田静夫	「いのち」の人間学 ～社会福祉哲学序説～	N F U	53	1999年	C
33	水田聖一	ロバート・オウエンの福祉思想～教育による福祉社会の建設	湊川女子短期大学紀要	33	1999年	A
34	中山 愈	資料「生命・自由・財産」の系譜～人間福祉思想論～	広島女子大学生生活科学部紀要	5	1999年	D
35	三友量順	仏教福祉研究への現代的アプローチ(1) 普遍思想と仏教福祉	立正大学社会福祉研究所年報	1	1999年	D
36	木村俊彦	糸賀一雄の福祉思想研究	姫路日ノ本短期大学研究紀要	28	2000年	A
37	池田和彦	糸賀一雄の福祉哲学	佛教福祉学	2	2000年	A
38	福田静夫	ホッブスの呪縛をどう断ち切るか ～新しい「社会福祉哲学」の構想のために～	N F U	54	2000年	C
39	滝口 真	社会福祉の思想についての一考察 ～キリスト教思想を中心として～	西九州大学九州社会福祉研究	25	2000年	D
40	橋本泰子	ソーシャルワーカー、ケアワーカーにとっての福祉哲学	月刊福祉	83/ 7	2000年	B
41	徳永哲也	研究A 福祉哲学の構想	長野大学紀要	23	2001年	C
42	阿内正弘	実践理性の「要請」について ～「福祉哲学」第1章～	淑徳大学社会学部研究紀要	35	2001年	D
43	吉田久一	日本における「慈悲」的福祉思想の展開 ～仏教的「平等」と福祉～	社会事業史研究	29	2001年	D
44	加瀬 進 草山太郎	糸賀一雄の障害者福祉思想に関する研究(その1) ～昭和20年代における「精神薄弱」児観・知能観を中心に～	京都教育大学紀要. A, 人文・社会	98	2001年	A
45	木村俊彦	社会福祉再編期における糸賀一雄の福祉思想の今日的意味	福祉研究	90	2001年	A
46	横山 穰	社会福祉哲学に関する一考察	北星論集	39	2002年	C

47	金子光一	J. S. ミルの福祉思想に関する一考察 ～フェビアン社会主義への影響～	淑徳大学社会学部 研究紀要	37	2003年	D
48	三谷嘉明	障害を持つ児・者の教育・福祉思想のパラ ダイム転換 ～共生思想の可能性～	北陸法学	10/ 3.4	2003年	B
49	滝口 真	阿部志郎の福祉思想と福祉実践についての 一考察 ～キリスト教における聖書理解を中心とし て～	日本福祉図書文献 学会研究紀要	2	2003年	A
50	村上 学	福祉国家と哲学～続・出発点としてのアリ ストテレス～	日本福祉図書文献 学会研究紀要	3	2004年	D
51	横塚哲夫	「福祉哲学」の必要性	ヘルスサイエンス 研究会	8-1	2004年	C

表一 福祉の哲学・思想研究の4つのカテゴリー別にみた著書論文の刊行状況

●=著書 ○=論文

	1955	1960	1970	1980	1990	2000	2005	計
A 実践		●	●○○		●●●●● ●○○○○ ○○○○○	●●●●● ○○○○○		24
B 関係性			○	●●●○○ ○○	●●●●● ●●●●○ ○	●●●●● ●●●●● ●○○		32
C 理念型	●	●	●○	●●●●● ●●○○○	●●●●● ●●○○○	●●●●● ●●●●● ○○○○○		43
D 連関			●○	●○○○	●●●○○ ○○○○○	●●●●● ●●●○○ ○○○		28
計	1	2	8	21	45	55		132

VI. 福祉の哲学・思想研究の課題

戦後の日本における福祉の哲学・思想研究の動向については、IV節でもふれたように、おおむね4つのカテゴリーに分けられつつ今日に至っている。前掲した文献一覧は、その業績の一覧ということにもなるだろうか。だが、今日までのこの領域に関する主要な著書・論文等を概観したとき、いくつかの研究手法上の課題もまた浮き彫りになっている。

第一に、研究業績の積み上げや継承があまり見られないことである。これは脚注の内容などをみる限り、国内の福祉研究者の所論が批判を含む積み上げ式の参照例としては殆ど登場してこないという状況からも窺い知ることができる。その理由

として考えられるのは、①この領域に関心をもつ様々な論者が自己の信念と論拠に基づきながら自説を展開する際に、そうした結論の多くが社会福祉にとっては自明的な価値や理念であるだけに、相互批判の中で弁証法的に積み上げていく体系にはなりにくい側面があること、②研究の基礎領域が、キリスト教や仏教などの宗教のほか、実存主義、マルクス主義、現象学、現象学的社会学、構造主義、解釈学、生態学、生の哲学、存在論、社会構成主義等の哲学・思想に関わる分野でもあり、いわゆる実践の学としての「科学化」を担う研究者や学界にとっては、ともすれば専門外（領域外）の事柄とみなされる傾向があること、などが推察される。

以上のことのために、第二の課題として、4つ

の 카테고리間の関連や展開が十分に議論されないまま今日に至っていることである。⁽¹⁶⁾ 本来的に言えば、行為のエートスを明らかにしていくことで**類型A**の「**実践の根拠**」が明確になり、その根拠が実践体系の基盤である**類型B**の「**価値や倫理**」へと規範化されることによって制度・政策に関わる**類型C**の「**福祉理念型**」の基礎が確立し、そうした一連の展開や体系を旧来の「哲学や思想の言葉によって解説」（**類型D**の「**哲学・思想史との連関**」）していく連続面が理想的な展開として考えられる。（図-1参照）ところが現実には戦後の理論的体系化の要請の中で、**類型C**の「**福祉理念型**」の議論のみが主流をなし、⁽¹⁷⁾ それとは断絶したところで、**類型A**の「**実践の根拠**」が“愛と奉仕”の美名のもとに語られてきた経緯があったのではないか。つまり、戦後から20世紀末に至るこの国の福祉の哲学・思想研究の課題を総括すると、**類型A**の「**実践の根拠**」と**類型C**の「**福祉理念型の根拠**」との間のジョイント役でもある**類型B**の「**価値や倫理の根拠**」へのアプローチが決定的に不足していたように思われる。このことは戦後の福祉実践のしくみが、必ずしも生活者である被援助者の主体的側面を中心には考えられてこなかったことと関連がある。その結果として、**A B C D**の4つのカテゴリーは個々分断されるかたちで論理と論者とを位置づけてしまった。近年、あいついで提示されつつある新たな「**価値**」や「**理念型**」や「**技術**」（図-1の「**結果**」参照）のほとんどが、**類型A B C**の展開の中から醸成されてきたものというよりは、むしろそれぞれのカテゴリーの中で諸外国から直接的に移入された知見に基づくものであることと、このことは無縁ではない。

VII. 結語

すでに表-2でも示しているように、1980年代から90年代以降にかけて、対人援助の現場の課題からその豊かな関係性の指標を模索しようとする**類型B**のアプローチへの関心が若手研究者の間で急速に高まりつつある。このことは、戦後の福祉哲学・思想研究の中では脆弱だった側面が、時代の進展とともに揺り戻しを受け、ようやく補強されつつあることを意味している。基礎構造改革期にあいついで重点化されるようになってきた価値や倫理や新たな援助技術の手法等が、いずれも対人援助の現場に生じがちな援助者-被援助者間の非対称性やスティグマに関する課題を意識した内

容として設定されつつあることは、その成果の一端ともみてとれる。

だが、現状を踏まえつつ全体を冷静にみても、未だに**類型B**の「**価値や倫理の根拠**」が**類型A**の「**実践の根拠**」や**類型C**の「**福祉理念型の根拠**」の全体へと影響を及ぼすまでには至っていないことがわかる。資格教育の中で余儀なくされる一元的な理解の枠組みと普遍的な人間観や援助観との間には、今なお超えがたい制度や政策の壁が存在しているからである。⁽¹⁸⁾

しかし、だからといって福祉の哲学や思想がこうした現実に対して無力であると断じるわけにはいかない。現存する社会福祉の制度や実践を本来の普遍的な目標に一步でも近づけていくことは、元来、哲学や思想の存立に関わる事柄でもあったからである。合理性に基づく法律や制度、政策や援助技術の体系に対して、そうした範疇だけでは捉え難い普遍的な指針が論理や実践の根拠としてうまく結びつくかどうか、今、この国の社会福祉に問われている。⁽¹⁹⁾

〈注〉

- (1) 福祉の哲学や思想を論じた文献の傾向として、「哲学とは何か」また「思想とは何か」を正面から論じたものは殆どみあたらない。ただし西洋哲学の系譜をひもとくと、例えば「哲学の本質は哲学すること」（ヤスパース）のように哲学の定義は哲学者の数ほどあるといわれている。ここでは、諸説に優劣関係を設けず最大公約数的な理解にとどめている。
- (2) 「考え方」「しくみ」「行為」の各段階に求められるものは<感性><理性又は悟性><実践力>ということになり、それぞれに哲学者の視点、社会学者の視点、実践者の視点等の諸要素が全体として求められることになる。
- (3) 秋山智久「〈社会福祉哲学〉試論——平和・人権の希求と社会福祉的人権観の確立——」『社会福祉研究』第30号、1982年、14～15頁。
- (4) 秋山「前掲論文」15頁。
- (5) 岡田はこう書いている。「まずそれ（社会福祉）は、人間福祉とは区別される。社会福祉は人間福祉一般を追求する諸活動・諸

- 制度の一環であるが、社会福祉をその全体とするならばあまりに広すぎるとらえ方となり、かえって空虚な概念になってしまう。福祉ということばはそのようなものをさすかもしれないが少なくとも社会福祉は保護、救済、援助、予防等の、問題に対する対策、不充足の充足というネガティブな契機においてとらえることが現実的な自己限定として必要である。」(括弧内筆者)岡田藤太郎「社会福祉学と社会学——変革の学と変動の学——」『四国学院大学 創立25周年記念論文集』、1975年、220頁。
- (6) この点で「福祉」と哲学は比較的馴染みやすいが、「社会福祉」と哲学との関係になると秋山が「思い切って論じることにする」と指摘している通り、一種の壁を意識せざるを得ないことになっていく。学的体系化は、この壁をより強固にしていく作用を併せ持ってきたためと考えられる。
- (7) 社会福祉士等の国家資格制度は、社会福祉の理論と実践の体系に試験問題の作問という形で新たな一義化を迫ってきている。
- (8) 岡村の「社会関係の主體的側面」と嶋田の「全人的人間の統一的な人格」は、ともに両理論を特徴づけるキーワードであるが、実証科学や客観主義を対峙させると両者の文脈にはおおむね一致点を見出すことができる。嶋田啓一郎、岡村重夫、他「座談会—社会福祉研究の課題と展望」『社会福祉研究』第24号、1979年、76頁。大塚達雄他編『社会福祉実践の思想』ミネルヴァ書房、1989年、302~303頁。
- (9) これらの課題は基礎構造改革期にかなりの程度改善されてはきているが、要介護認定や障害程度区分の実態をみる限り依然として対応途上の段階とみる必要があろう。
- (10) 前段の「なぜ“同じ”人間なの？」との問いかけは、小学生が福祉教育の体験学習として、ある障害者施設を訪れた際に「人間はみな平等ですよ」との教師の教えに対して1人の児童から投げかけられた素朴な問いかけ。一方、後段の「なぜ人を殺してはいけないの？」は、いわゆる“佐賀のバスジャック事件”を契機に一種の社会現象ともなった問い。
- (11) 中野伸彦『福祉の輪郭と思想—対人援助のパーспекティブ—』創言社、2001年、7頁。
- (12) 今回の類型化(特にABC)にあたり西洋哲学の三つの系譜を参考にした。一つはターレスやプラトンのようにすべての原因や起源を説明する原理を模索する思潮としての「絶対的存在を想定する系譜」(→**類型A**。福祉は支えの行為であり、行為の起源はエートスである)。二つ目はデカルトやカント、ヘーゲルやフッサールに代表される「主観と客観との対峙を問う系譜」(→**類型B**。対人援助の関係性を模索)。三つ目はベルグソンやヴィトゲンシュタインやデリダなどの、人間を含む「全体的なシステムを探究する系譜」(→**類型C**。社会福祉の全体的なパラダイムを模索する)の三つである。
- (13) ここに記した論者たちの問題意識やアプローチは個々違っているが、援助者—被援助者間の関係性への関心という点では一致している。
- (14) いわゆる体系理論の研究者である岡村、孝橋、嶋田の3者をあえてここに掲げたのは、その論理や主張の一貫性において一定の思想性が認められていることによる。尚、同様の理由で文献一覧にも3者の主著を掲げた。
- (15) ここに示した4つの類型をディスカール(言説)とプラクティス(実践)との距離関係でみていくと、最も近いのが**類型A**であり、次いで**類型B**、**C**、**D**の順に開きは大きくなる。尚、ここに掲げた社会福祉の体系図については、日本社会福祉教育学校連盟や日本ソーシャルワーカー協会が従来より提示してきた体系モデルを参考にしていく。
- (16) 注(12)に指摘した西洋哲学の系譜は、例えば観念論に対する唯物論、形而上学に対する実証主義、認識論に対する存在論のように絶えず諸説のリアクションの中で展開されてきた歴史を持つ。
- (17) 後に“不毛の論争”とも評される「本質論争」が、当時、唯一**類型C**の範囲内で論じられたテーマであった。
- (18) この点について多少解説を加えると、例えば資格試験の出題に際して、近年特に重視されてきているのがevidenceという言葉(試験問題の出典や根拠のことを指すらしい)である。仮に「生存権」の根拠と目さ

れる憲法25条をみても、この規定が具体的に施策化されたものが生活保護であるとき、補足性の原理に基づく制度運用に忠実であろうとすればするほど、憲法や「生存権」に示す普遍的な人間観や援助観から遠ざかってしまうという皮肉な現象を生じさせることがある。そこに制度や政策の壁を感じてしまうのである。

- (19) 本稿は、硯川真旬編『社会福祉の課題と研究動向』中央法規、2005年の第2章に掲載した拙文「社会福祉哲学・思想」に大幅な加筆と修正を加えたものである。

